

飼育レポート

大森山初! ワタボウシパンシエの人工哺育

飼育展示担当 関谷 藍子

5月18日にワタボウシパンシエのオスの赤ちゃんが生まれました。名前のとおり綿帽子のような真っ白い毛が頭に生えた小型のサル仲間、絶滅危惧種に指定されています。

生まれた直後、母ザルが自分の仔だと認識できずケガを負わせてしまったため、やむを得ず人の手で育てることにしました。しかし、大森山動物園でパンシエの人工哺育を行うのは初めてのことで、母ザルが生まれていしかわ動物園のかたにアドバイスをいただいたり、担当者たちで知恵を出し合ったり協力しながら取り組みました。

生まれたときの体重はわずか37.5g。人の片手に全身がすっぽり収まってしまうほど小さく、毛がほとんどない黒っぽい体をしていました。ケガに負けず、たくましく育ててほしいという願いを込めて、「ジャングル大帝」の主人公からとって、「レオ」と名付けました。願いが通じたのか、レオはひどいケガをしていたにも関わらず、初めから本当によくミルクを飲み、鳴き声も大きくやんちゃでした。担当者の指を握る力も手のひらサイズの動物とは思えない力強さで、生きようとする意志をひしひしと感じました。



授乳の様子



27日齢

授乳は、初めの1か月は1日6回、朝6時から夜10時頃まで2時間置きに行いました。ミルクを一度にたくさん口に入れてしまうと、むせて窒息死してしまうこともあるため、注射器で一滴ずつ慎重に与えました。また、半分以上欠損してしまった尾と左後肢のケガもなかなか状態が安定せず、こまめに治療を続けました。

現在は、保育器からケージに引っ越し、ミルクも卒業、大人と同じようにバナナやリンゴなどの果物を自分で持って食べられるようになりました。心配されていた短い尾や中指しかない左後肢も器用に使って、元気に跳び回っています。頭の白い毛も長く伸びてきて、体も日に日に大きくなってきました。赤ちゃんの時期は残りわずかですが、ぜひ会いに来てください!



生後8日目仔の体重測定の様子(心配そうに見守る母サクラ)

て起立させ子牛用代用乳を飲ませました。また、母サクラの乳を絞り哺乳瓶で初乳も与えました。翌日の夕方には自力で乳房から授乳できるようになりましたが、代用乳の人工授乳も念のため1週間継続し、朝夕の体重計測をしながら仔の成長を見守っていました。仔は出産当日の体重(5.05kg)から計測毎に増え続け、10日後には8.25kgになるなど順調に成長を続けています。サクラが仔の授乳を拒絶するようになったこともあり、生後35日目くらいから親と同じ餌を食べるようになっていきます。

8年ぶりとなるトナカイの繁殖

飼育展示担当 柴田 典弘

6月7日、大森山動物園では8年ぶりとなるトナカイの赤ちゃんが誕生しました。午前10時、同僚から「観覧通路沿いで分娩が始まっている」との連絡を受け急行したところ、母サクラ(メス9歳)は既に仔の両前肢が出ている状態でした。間もなく生まれそうであったため、私もお客さまと同じ場所でカメラを構え出産を見守ることにしました。そのわずか5分後、一旦座って再び立ち上がると同時に無事出産し、お客さまの歓声と拍手に包まれました。直後から仔を舐めまわすなど、良好な関係性が見取れましたが、今年の秋田は6月に入ってから30℃を超える日が続いていたこともあり、サクラは出産により余力がなくなった様子でした。懸命に仔を立たせようと促した後、すぐに座りこんでしまうを繰り返していましたが、気温がさらに上昇し、このままでは母子ともに危険な状態になると判断、出産から1時間30分後に仔を介添えし

タンチョウのヒナが2羽孵化しました

飼育展示担当 館岡 幸枝



左: 孵化後10日齢のヒナ(1号) 中央: オス親
右: 孵化後8日齢のヒナ(2号)

順調に成長している2羽
(奥: 2号、手前: 1号)

ようやく雪も溶け、春に向かいはじめた5月。タンチョウに新しい2つの命が誕生しました。タンチョウは一度に1~2個の卵を産み、オスとメスが交代で抱卵し、約1か月程で孵化します。今年は2個の卵を抱いていましたが、どちらの卵も無事に孵りました。

孵化したてのヒナは手のひらに乗るほど小さく、4月から担当になったばかりの私は大きく育てられるのかと不安になりましたが、1週間もすると2羽は軽快に展示場内を駆け回るようになりました。しかし、日が経つにつれて1番目に孵化したヒナ(以下1号)と、2日遅れで2番目に孵化したヒナ(以下2号)に体格の差が出てきたのです。1号

は母親からしっかりと餌をもらっていたので順調に生育していましたが、2号は1号よりも成長のスピードが遅く、力負けしてしまいうまく餌をもらうことができない状態でした。

このままでは2号は死んでしまう恐れがありました。野生下では餌が限られているため、結果的に強いヒナのみ育つことが多いのですが、ここは動物園、なんとか2羽ともに生育させたいと強く願いました。食べやすいミズなどを捕ってきては与える工夫や、毎日体重を計測し餌をどれだけ食べているのかをチェックするなどきめ細やかな気配りをしました。そのかいあってか、少しずつでしたが2号の体重は増え続け、自力で採食できるようになったばかりか、今では1号よりも大きくなるなど順調に成長しています。一時は最悪の状態も考えてしまうほど弱々しかった2号。その生きようとする力には感動を覚えました。大森山動物園にご来園された際は、ぜひタンチョウの親子の様子をご覧ください。

+ 動物病院から 懸命のリハビリ ~ 娘のゆりも応援 ~ 獣医師 高橋 拓



床ずれ治療後の陸



後ろ足を吊って展示場を散歩

2014年3月、レッサーパンダの「陸」が左足に力が入らないと獣医師に無線が入りました。最初は、軽度の脱臼かと思いましたが、徐々に両方の足に力が入らなくなっていきました。神経疾患を疑い治療しましたが、麻酔をかけ、レントゲンを撮ったところ脊椎症を疑う所見が確認できました。その後も継続し治療を続けましたが、完全な回復は望めませんでした。さらに治療中、両方の腰骨のところが床ずれを起こし、皮膚の欠損が大きくなってしまいました。そのため皮膚が再生するような薬を使いおむつをはかせ、両方の腰に堅い床が当たらないようにふかふかのマットを敷いてケアし、日々マッサージをしたり、後ろ足を吊って歩行したりリハビリを続けたところ、右の後ろ足を若干動かすことができるようになりました。その結果、右の500円玉大の床ずれはき

れいになりました。現在は、左の床ずれの治療を行っています。

「陸」は2013年6月26日にメスの「ゆり」を生んだお母さんです。治療の時は娘の「ゆり」も心配そうにいつものぞきに来ます。また皆さんにお見せすることができるように、「ゆり」と一緒に遊ぶことができるように、今後の「陸」のケアについて担当飼育員と協力し、一番良い方法を探しているところです。



お母さん、大丈夫?

母を心配する娘のゆり